

藝聖の訓戒

樋口吾笑

語れ語るな、弾け弾くなとは藝聖の訓戒として古來やかましく傳へられ居るも實踐は甚だ難しいと見へ其の蘊奥に達し妙域に入り得たるを聞かず。吾等の平素深く敬愛せる某大家は吾等に對し左の如く語りたり、甚だ聞くべく味ふべきものありと信じ其の要旨を摘録す。

明治の或る年満座に於ける事實談。名人竹本組大夫盛衰記逆櫓（糸仙作）を以て中入となる。組大夫は渾身の力をこめ語りたり。當時私どもは斯様な逆櫓を聞いた事いまだ曾て有らず、満場の聴客とても同様。朽ちぬ其の名を福島と語り納めたが、物凄じい感興が渦まき立つた。これが爲に中入飛びに出たる竹本春子大夫の白石噺茶屋場が TENT 聞へななだと云ふ大騒動云々……それは春子の白石揚屋がわるいのは決してない、例に依つて春子一流で歓迎されねばならぬのぢやが組大夫の藝の餘力が春子の語り時刻まで浸入したのである。實際組の目的は春子にあらず、最後の大隅にあつた。思ふに當時の組と大隅とは打て替へで技藝の上に於ては絃々相摩すの競争！所謂君子の争ひが永らく續けられたものだ。而して組の油屋善助と云へば何人も天下の名品たるに異存なく無條件で税額を通した程の名品なるが故に大隅の爲には無論大敵であつた。が大隅の三味線は豊澤團平といふ日本無双の

名人が付いて居る、酒屋で「なふ親爺どのさうぢやないか。さうぢやない」の言葉に籠り居る變化は何人も眞似得ざる絶妙であつたといふから組に劣らぬ名人。而して此の名人をつくり上げたる名人團平が弾けよ弾くなと云ふ呼吸を心得。語れ語るな、極意を叩き込んで居るから、語り活かすべき所は極力語り抜き、語り拾つべき所は惜氣もなくほかす、此の故に擒縱自在に操られて聴客は飽かぬ、退屈せぬ、あくび所か藝に魅られて緊張時刻を忘れて聞く。いや其の聞かすといふのが藝の奥義である。これ迄藝が進むには所謂虚實の配合按排宜しきを得て虚に偏せず、實に囚れず、文意を主として活殺自在に語り、虚實の間を巧く弾き徹すと云ふ事が大夫三味線の天賦の職責である。日本人の音に合致せぬ大夫、パチ／＼と騒がしく徒に腕自慢三味線で大夫の邪魔する如きは全く藝の魔道に彷徨する者であると思ふ。

現在の大夫三味線にして其の天職を了得して本分を守り、大夫の爲に犠牲を拂つて成功せしめ、又自己の領域となりては十二分に弾き活かすてふ活殺自在の三味線が何人あるであらうか。弾けよ弾くなの妙趣を會得せる程難行苦行せし者。語れ語るな、奥義に到達する程修行鍛練せし者は今この時。大東亞建設に邁進せる帝國臣民の精神を、此の結構なる藝道の力に依つて昂揚發揮すべきである。これ乃ち近松翁を始め元祖義大夫以來の恩人に報いる途にして淨瑠璃奉公忠君愛國の赤誠は茲に明かに顯現されたものと認めらるゝであらう。努めよ努めよ。語れ語るな、弾け弾くなの解すなはち如件